

2024年5月2日

応募者各位様  
参加者各位様

学校法人恵泉女学園  
公募プロポーザル事務局

### ご参加の御礼と審査講評遅延のお詫び

この度は、ご多忙中にもかかわらず、学校法人恵泉女学園フェロシップホール建替え計画公募型プロポーザルの公開プレゼンテーション・作品展示見学に、多数方々のご参加賜りまして誠に有難うございました。

おかげさまで公募型プロポーザルによる設計業務委託者の選定が出来ました。

心より厚く感謝申し上げます。

また、審査講評の発表が予定から遅れてしまい誠に申し訳ございませんでした。

ここに審査委員による審査講評・審査経過・主催者からのメッセージを掲載の準備が整いましたので公表致したく存じます。

今後とも末永くご支援賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

有難うございました。

## 恵泉女学園フェロシップホール建替え計画設計業務委託 公募型プロポーザル審査講評

この度は、恵泉女学園フェロシップホール建替え計画公募プロポーザルに応募頂き有難うございました。審査講評を以下の通り発表させていただきます。

### 審査総評

選定委員会委員長 乾 久美子

フェロシップホールの建替え方針を問う本プロポーザルは、厳しい高さ規制をクリアしながら、決して大きくはない建設エリアの中に現状の座席数を大きく超える1200席を確保し、さらに礼拝と多目的利用を両立させるという、難しい条件を多く抱えたものでした。また、創立100周年を迎えるにあたり、これまでの恵泉女学園の営みを継承しつつ、これからの学園の活動やイメージを前進させていくことが求められました。条件をクリアする提案をつくるだけでも多くの知見と労力が必要となる中で、69もの提案が提出され、たくさんの力作が揃いました。

参加していただいた建築設計者・設計チームのみなさまに心から敬意を表し、感謝申し上げる次第です。みなさまが提案作成のために要した知恵と時間、エネルギーの大きさは、学園に大きな勇気と希望を与えてくれるものと信じています。公開プレゼンテーション・ヒアリング対象には限られた数しか選出できませんでしたが、その他の提案も要項の精神を真摯に汲み取っていただき丁寧に考えられた内容で、それぞれ甲乙つけがたい魅力的な提案が数多くみられました。

最終的に残った最優秀作と優秀作はどちらも、特に恵泉女学園らしいと感じる魅力があり、また、ホールとしての新しさを感じるものでした。

優秀となった御手洗案は学校のホールだからこそ可能といえる開放性を生かしつつ、ホワイエと一体となった回遊式舞台が魅力的な提案で、様々な使い方の可能性を多くの委員が感じました。また、1階席と2階席の席数の配分がよい点も評価されました。しかしながら、舞台部分の天井高が低く舞台機構が十分に設置できないことに対して、幅広のボリュームや構造形式の観点から根本的な解決が難しいと思われたことと、中庭と南側の両方に対してファサードとしての立面に特徴がないことが懸念として挙げられました。

最優秀の妹島案は、教会建築の内陣やアプスが参照された構成が、ワインヤード型の要素を取り入れたエンドステージ型ホールという形式に結びつくという新しさがありました。また、狭小な建設エリアの中で座席数を確保するため、2階の座席数が多くならざるを得ないという条件に対して、2階席そのものにアイデアのある少ない提案のひとつでしたが、それらが授業や聖歌隊席などで多様に使えそうであることも評価されました。さらに、外観では花びらのような形が、学園の園芸の歴史を物語っていることや、シンボル性が高いことが、100周年を記念する建設にふさわしいと評価されました。半円形に近い舞台が後方でやや狭隘であるという指摘があがりましたが、舞台部分で歪んだ円形にするなど設計段階で改善可能と判断し、本作を最優秀作とすることにいたしました。

第一次審査においては、はじめに参加資格及び応募要領等の規定に違反する行為がなかったかの確認を行いました。続いて、評価の進め方について協議しました。法的条件に抵触する恐れがある提案については、はじめから除外するのではなく、注意しながら判断することとしました。また、選定に当たっては、意思確認として投票を行うものの、できるだけ協議によるものとし、数の多さだけで選定や順位を決めないこと、ヒアリング対象者が5者に絞られるまでは応募者名が分からない方法により行うことを再確認しました。

評価については、以下のような手順で行いました。はじめに、委員全員が時間を掛けて静かに技術提案書を見る時間を取り、その後、審査員が気になる点や分からないことなどについてお互いに意見を述べながら、技術提案書を一巡して見て回りました。

その後、各審査員が10票(但し、本山早苗委員・松井信行委員については2人で10票)を持ち票としてふさわしいと思われる作品を選出した結果、18点の作品が選ばれました。選ばれなかった作品の中に、これは残すべきものだという作品がないかどうかを確認するため、委員全員で一点ずつその内容の特徴と優れた点、並びに課題点を述べ合いました。課題点については、それが案を具体化する上で根本的に見直さなければならない問題なのか、骨格に影響が少ない修正で解決できそうな問題なのかも議論しました。そうして、次の段階に進む作品を選ぶ作業を協議によって選出した結果、22点の作品が残りました。

そこで、再度選出された作品を1つひとつレビューしました。そして、今度は各審査員の持ち票を3票(但し、本山早苗委員・松井信行委員については2人で3票)として、ふさわしい提案を選出することとしました。その結果、7点の作品が残りました。

ここで一旦休憩をし、再開後改めて選出された7点の提案書を個人個人で見る時間を取った後、一つひとつの提案について審査員全員で各提案の特徴と優れた点、課題点を述べ合いました。そして、再び前の段階と同様にして注意深く投票と議論を重ねて検討した結果、二次審査への参加資格者として、5者を選定するに至りました。

ここからは実名での審査に切り替えられ、発表の順番は一次審査終了時に審査委員が代行してくじ引きにて決定しました。第二次審査においては、公開の場でプレゼンテーション・ヒアリングをおこない、選ばれた優秀提案者5者から、それぞれの提案内容の説明を受け、それに対して審査委員と提案者との間で質疑応答が活発に交わされました。持ち時間はプレゼン(発表)15分、ヒアリング(質疑)30分で、一般傍聴者(プロポータルに応募登録した関係者)、学園の生徒教職員、メディア関係者など約300人の聴衆が耳を傾け、ほぼ一日を費やしての、熱気のコもったプレゼン会となりました。

その後非公開の場で最終選定委員会が開かれ、最初に5つの提案に対して各委員からそれぞれ感想・評価が述べられて、専門委員からの技術面での助言もあり、委員全員が提案に対する理解を深めました。そして、各審査委員が3票(但し、本山早苗委員・松井信行委員については2人で3票)を持ち票として最優秀にふさわしいと思われる提案を選出した結果、御手洗案と妹島案の二つに絞られ最終選考へと進みました。

学校法人恵泉女学園 学園長 廣瀬 薫

69に及ぶ参加者の皆様には心からの御礼を申し上げたい。

非常に示唆に富んだ提案、考え抜かれた労作、大胆な発想に、多くの刺激を受け、心燃やされ、夢を見る時を与えていただいた。

選考には長時間をかけ、専門家の立場からそして教育現場の立場から率直な評価を交換した。一者を選択する困難を覚えつつ、最終的には一致して結論にたどり着くことができた。

恵泉女学園が100周年という大きな節目を5年後に控え、それを未来への飛躍の時とするために、今回の建築プロジェクトは大きな期待を担っている。

それに相応しい態勢の構築を願って、学園としては余り経験のない「公開プロポーザル」という手法を選択したのは、実力を超える試みかも知れないという懸念も当初にはあった。

けれども、まことに素晴らしい3人の外部審査員を得ることができ、学園の事務局の奮闘もあって、主催者としては最善の体制を整えて臨むことができたことに感謝している。

今後プロジェクトの完成に至るまで、良き協力態勢を築いて歩みを進めたく願っている。

恵泉女学園中学・高等学校 校長 本山早苗

フェロシップホール再建に向けて、2年余り中高の建築委員会で検討を重ねて参りましたが、ようやく具体的な第一歩として、設計者選定のための公募プロポーザルを実施することができました。

公募プロポーザルの実情にも疎い私ですが、乾委員長、小堀先生、本杉先生という名立たる審査員の先生方のご尽力により、大変意義深いプロポーザルを実施できましたことは、この上ない喜びです。

今回の公募プロポーザルと公開プレゼンテーションは、一年前に大学の募集停止を発表した恵泉女学園が、100周年を機にさらに発展を目指す意気込みを公にするために、大変意義深いものとなりました。建築界で高名な先生方が審査員となってくださった効果は抜群で、69もの応募作品を得ることができ、二次審査会場にも多くの専門家、提案者が来校されていたようです。

特に二次審査で発表された5団体の提案はどれも意欲的で、それぞれの魅力を感じさせるものでした。在校生にとりましても、全ての提案書や二次審査を見学することで、建築設計という分野の魅力を身近に感じる、またとない機会となりました。

さらに、現在のホールへの愛着を保持しつつ、新設ホールへの大きな夢を描くことにつながった今回の公募プロポーザルは、学園に集う全ての者にとって喜びであり希望です。

恵泉女学園中学・高等学校 副校長 松井信行

今回の全ての提案書を見て、「園芸の恵泉」を思い起こした。

いうまでもなく「園芸」は学園創設以来の教育の柱のひとつである。多くの応募者はそれを咀嚼して提案に織り込んでくださった。園芸教育を担当する一人として心からありがたいと思った。

ただ、植物を植えれば園芸になると思うことは間違っている。

建築物に植えこんだときその植物と対話ができるかが大きな問いとなる。

植物は成長し枯れる。成長すれば落葉する。風が吹けば枝が折れる。枯葉は飛び、流れる。植えた後にどのようにその植物と対話すればいいのか、それが明らかではない提案も多かったように思う。

施主はその植物と一生付き合うのだ。

対話には時間とコストが必要で、それぞれには限界がある。

妹島氏の提案は程よい対話ができる気がした。うるさくもなかった。

御手洗氏の提案は対話には努力が必要だ。

植物の種類を選定、灌水・排水方法などの管理方法、おそらく常に対話が必要と思った。

他にも果樹を植えるものや、ハンギングをするものもあった。植物たちの悲鳴を聞くことになるだろうなという提案もあった。多くの提案者が「園芸」に引きずられ過ぎる面があったことも否めないと思う。

多すぎる植物たちと対話することは難しい。今回のプロポーザルでは多くの考え方を見ることができた。

結果として植物とのことを中心に見させていただいた感じがする。

学校法人恵泉女学園 事務局長 宇田川篤

2回目の投票で妹島氏案と御手洗氏案が残ったが、私は御手洗氏案が気に入っていた。

その理由は以下の通りである。

・回遊式の舞台なので、「今の使い方」+「新たな使い方」ができる。

生徒たちがどのような表現、発表をするのか楽しみ。

・木が美しい。恵泉の校舎と調和がとれている。

しかし、他の審査委員の方々のご意見から、天井の形状や舞台の高さ等に課題があることも理解した。

最終的には妹島氏案が採用されたので、私はそれを尊重する。

近年稀に見る卓越したコンペとのことであったが、生徒たちも参加して、このような公募型プロポーザルを行えたことは素晴らしい。

乾先生、小堀先生、本杉先生を専門委員としてお迎えできたことは大変感謝なことであった。

学園の将来を見据え、今後予想される多様なニーズに適切に応えるホールとして設計施工がなされていくことに期待している。

以上